讀史餘感

全

へ4
1410

門 利 4 1410

近藤幸殖著述

讀史餘感

有為堂藏版

稽古

敍序

從二位源重德

源重德印

美善刺惡使讀者有所懲者詠史之用也自山陽賴氏好詠國史後進從之效之西洋撰譯譯詩殆非通漢語者不能得西曉獨龍山近藤翠殖不躋之旣涉獵史乘隨感情

之何哉盖以國詩詠之名曰
讀史雜識以較諸山陽諸人所
詠體裁無差等以論巧拙
能也所以詠之事實之甚而周
之多辭無誤我之別人之易
讀易曉則其勸善懲惡之用

大有過焉且夫詩歌以言近易
曉爲旨今年殖所著焉亡於
此篇曰
朝無采詩之官則必知其所采
若在此而不在詩也於是謂序
乃爲一言之

辛未中元後一日

鷲津宣光撰并書

讀史餘戯序

我許に客あり名を薛平陸といふ此もの常に深く信じらる佐々木氏の家のことども語りてきかせ二とせ斗りの事いはふひとつふたつ云の物語をして今よりを暮さむといふら此さまさにこの人のみやうすひかせて置きたり　このすきいまきまちはのきりいふものの言葉は此本まさにおとしいふ此讀史餘戯をよくつかひ此しむきまくらことの下一段のあらむ大刀をとこえ術用とされその一二らそれに字面のあり讀まずとも

大和詞をこのましく人がらのよきを歌くにつゝ
むかしたゞ[illegible]英れ富士[illegible]わか翁は師
の[illegible]勝ちて[illegible]
[illegible]後[illegible]
[illegible]國[illegible]の[illegible]見[illegible]
つ[illegible]学[illegible]
[illegible]大和[illegible]しいの[illegible]あ
[illegible]

明治二年

七月一日

幸翁 井上文雄書

讀史餘感

亀山 近藤幸殖著

五瀬皇子

皇子ハ彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊の長子神武天皇の御兄に坐しまして共に長髄彦を征し流矢にあたり還て紀國にて薨給ふ因て竈山に葬

君か為清く流る[illegible]

日本武皇子

景行天皇の皇子小碓と稱し給ふ十六にし

て西熊襲を征し女裝して其國に入手つゝら梟師を殺し給ふ又東夷を征し鰕夷地に至て酋長を俘にして其餘を釈し給ひ邊境乃安し其神武世のあまねく知ところ後なわ

西東ゑみしをことゝくまつろへて日本武尊の名そ残りける

豐城皇子

皇子ハ崇神天皇の長子にてましませしを天皇命して東國を治し統給ふ　景行天皇の朝に皇子の孫彦狹島王を以て東山道都督となし給ふに道にて薨給ふ東人悲ミを

傷ミ悲ミ屍を竊ミもちて歸り葬といふ東人の皇子の御徳になつき志たふこと知ぬし然古史缺畧其績委しく考る所なし

東人のこゝろもたけくかちぬるはみな此みこのいさをなりけり

稚郎皇子

皇子ハ應神天皇の少子にてましまして立て太子となる天皇崩し給ひしより御位を皇兄に譲り給ふ皇兄も此をきゝ給はて三歳まで相譲りて後皇兄の御心動かせ給ひなんからせるを知りて終に自殺しぬ

世の傳ふる道あるをもて位の次序をたゞされし人哉

磐阪市邊押磐皇子

皇子ハ履中天皇の長子にましゝを
反正允恭二天皇みな　履中の御弟なれ
安康天皇ハ皇子に於て従弟なり　安康天
皇其嫡嗣にましゝを我れとく皇子に御位
を譲らまほりしなふ志あるに眉輪の變
あるによりて　雄略天皇立給ふ　允恭天皇
の御子にましゝけるが故に皇子を忌給ふ
事甚しく終に殺しまひき皇子死に給ひき給

ひし後仲子といふ臣殉し使主父子をの二
御子をかくしまゐらせ後二御子ともに天
位をふみたまへる皇子の御徳おもきなり
殊にまたかゝりしかば忠の切なるをあらはしたる者なれ

舎人親王

王ハ　天武天皇の御子に在しまし　文武
の朝に勅を奉して日本書紀を修し給ふ書
紀天武紀をもて直に　天智天皇に継けり
然れども近江の　朝廷といふ詞あり
清かる系にも今あるに此朝廷を知られたらむかしことをいへるまた史

桓武諸皇子

三皇子ハ　平城　嵯峨　淳和の三天皇なり

葛原親王　賀陽の宮と同しく世の望ミ大かくなりし

萬多親王　曽て姓氏録を撰したまふ

賀陽親王　葛原の宮と同しく世のあふくところ

葛井親王　十二歳にして射技を能したまへ

良岑安世　若き時騎射をこととし後大ニ学を勉めたまひて名臣となり民の為ニ水車を初めたまへ遍照僧正ハ安世の子なり賀陽王の御子にも

忠貞王といへあり

薬子なきくるとおもふ事はそこなひの猶てうたれ年なりにもおもふ哉

高津の親王後のあやふきをり清く身をもほそく世なりけるか

子なりとし父乃ここ東し清いかつらせくをそなけて猶白ひきの錦

賀陽乃宮と清く良岑の葛原いつ世はし絶をおもふに事

ふ代をことのいまもつたふ今しら絶ぬ君の代の余命もあまりある哉

幼なれどなを下毛人りかにしも猶まなほ其の気ハたかきをもの者に猶

大摩のかもりしは志ら次民乃為に死てうらめくらす水車乎年

中貞王

王ハ桓武天皇の御孫賀陽王の御子なり貌いと醜くましませとも道ニ御志ふかく清和の朝に諸國ニ任せさせたまひて学校を興し民を教へたまひて風勢世にあらはれたまへり

貌こそミ山木なれ絶ぬ緒を染まれとも花も匂ひをせてる哉

廢太子恒貞　太子の變藤原良房奏之　文徳天皇良房を
まらく漢の蕭何ふ比しゑふとゐへり

太子ハ　淳和天皇第二の御子にして幼に
して岐嶷よく經史を讀玉ひ　仁明天皇受
禪ましましく太子に立給ひ後讒によりく
廢せられ給へり

をやくよるにかくれて蘇くもおのゝふて愧のたるもおそてありしと

重明親王

王ハ　醍醐天皇第四の御子ふして学を好み
孝の御心甚厚くましまして天皇の崩し給
ふにあたり御哀慕大かたならず次三年の喪

を行ひゐふ

三と勢まらく然るを後の世ち衣沼を用ひと好まぬ人多し

兼明親王　前中書王　醍醐天皇の御子にてましまし
圓融朝左大臣とありし讒をうけく退けられ
莊を小倉に營み又た兇ふ沮られ菟裘賦を
作りて憤を遣り自娯みふ世に中書王と稱
せり

後中書王

ぬ送衣了らへし菟の裘を着りけし付と恨みありとぞ

具平親王　村上天皇第七の御子にましゝはを業を慶滋保胤に受たまひて文を能し和歌にも工なりし世前中書王にむかへて後中書王と稱せらる

風雅男は志れさる世も人もは蒲葵乃車に君をのせんやハあらぬ

以仁王

王ハ後白河天皇第二の御子にましまし源三位頼政と兵を興し平氏を討たまひしに事ならさりし遂にも王の令旨を奉して頼政の族頼朝をはしめ東國の諸源悉く發起して終に平氏を滅せり

赤旗を海に沈めし白きを蔵見まほしき代にてかまふ程

護良親王

王ハ後醍醐天皇第三の皇子にましましゝか天皇高時を誅したまふ王の御謀尤多し皇子にして力を王事に勞したまふこと日本武尊の後唯王殊にかくの如きあり後老賊高氏の為に害されたまふ今に至るまて誰か切齒慟哭せさるものあらんや

あらその後の世乃ひとやにかくとさへて光ハなき余輝にけりこそ

後醍醐天皇諸皇子
後村上及皇太子恒良成良親王ハ寵姫藤原氏の出也皇太子恒良成良親王尊良親王ハ新田の一族と共ニ北國ニおもむかせ給ひ越前金崎の城陥りて尊良親王ハ新田義顕等と共ニ御自害皇太子と成良親王とハ擒と成給ひて都ニ上りたまへり翌年の四月高氏の為ニ毒害せられ給ひけり宗良親王ハ征東将軍懐良親王ハ征西将軍にて征東将軍ハ遠江ニ坐し征西将軍ハ筑紫の菊池か許ニ坐しける武光武政奉しかしつき威九州ニ震へり

家迷よはけまかせもおのれか孫々連なる枝の雪折しめたく無
菊たとなそいとひまつしなんらん杼子抑し持くふ日ふは君か命し給
つれなきん哉路の雪ハわきとく龍ねらみやこは申あはしたら今もきゝき

懐良親王菊池ニ坐しことをいかに思しけん新葉集御詠
ヒニソヘテノカレントノミオモフミニイトヽウキヨノコトシゲキカナ

義良親王ハ北畠顕家奉しかひて陸奥より上り給ひ利根川の戦ニ勝宗良親王と尾の熱田かく出あひ給ひ其勢合五十万青野原に戦ひておれ不勝給ひ伊勢の雲津川ニ戦

ひくまさ敵を敗りて両親王終ニ吉野ニ赴き
またひき廟謨よかゝりされハ終ニ王業ニ益な
しといとくかなし
吉野川をまたそのうち利根の川雲津の川乃かなとぞえれし

野見公宿禰
出雲の人　垂仁后の崩し給ふとき葬儀を
議し給ふに公土偶を以て殉となさんと請
ひ遂にあれた　天皇是を聞せまひ殉死を禁
しなひ後定制となれり公出雲の國より土
師百人を徴しそ人物車馬を作らしめ御墓

の前に列ね給ふ其名を樹物といふと史に
見えたり
命は重きかなしと人馬を埴輪にしく事たゝせたるよ

田道間守
垂仁朝ニ常世の國ニいたりて香菓を求めし
かへるに及むく　天皇已ニ崩し給ふ間守
愁て伏見の陵にいたり慟哭して卒
以ましけるをおもひ猶をもとめて君の為に得て来し橘乃實を

橘媛
日本武尊東征の御時相摸の海を越給ふに

浪風いとあらくて御船も以まや覆らんと
せしかハ媛まうして曰海神祟をなせるな
り妾身を以て贖んといひもあへず浪に投
して失給ひぬ

和田津海乃神ハあらくみなき浪ぞそよ此為きりける

大臣武内公

大臣五主に事て大柄を執り官にある事二
百四十四年と以へり其壽を詳にせずいは
の世にかかるためしあるをきかず

三百年にひとたびまさる世にも又ハ河の世に例ある人ぞ来

真根子

壹岐直たり貌甚武内公に似たり武内公の
弟甘美内宿禰非望をいだけりと讒した
り朝廷使を遣し案驗しけるに其時直根
子貌の似たるを以て自殺して公にかはり
救ふ故に公東にかへり自許る事を得たり
よりて磯城の川上に神祇を祭りて探湯の
事あり甘美内罪に伏せ

茱田別

いさ紀よく君の命を捨きまさハ磯城の川せ神もいかにきん

應神朝新羅の朝貢せざる事ありて将軍荒田別をして徂き征せしむ比自炑南加羅多羅卓淳加羅七國を平け猶古奚津に至りて南蠻を屠りて百濟に賜ふ終に王と誓ひてかへる七國といふも國の名なり任那十一國の一なり

みやこ路ハなをむく任那ひめをたてしをあしたなきをしそはしもや見えすなれ

阿部比羅夫

齊明朝に越前の守となり蝦夷肅愼を撃て大いに克てり

次きさし異国のえをうちとむかしひらきし文字の道ぞ学ひし

阿直岐

百濟王の子なり經典に通し應神朝に来歸る天皇問曰汝の國になほ汝に勝れるものありやと對曰王仁といふものありと又此を徵る

善ありとよき彼りもとらん我心をおもたんぬきみか生きる給

王仁

百濟の人なり徵に應して来論語を獻る稚郎皇子従て学ひ給ひ皇子御徳のなれるなり

千世八ちよまもぬ廣しれふ手ありまてそ尽書乃貢ものちまた

に基をなら

田道

仁徳朝ニ新羅を征して功有已にして蝦夷を伐て利あらずしてついに死をなす妻これを聞悲泣して死せり

國のため身はてぬとも名ハそのたけやちりきれ鉾を掘夫乃あらしもやくて殺ちられハさせぬ道をまもれみのみしを残ハかみもまよハ

的田宿禰

仁徳朝ニ高麗人鐵の的を貢しけるに宿禰をして射させらるニ射て出せしを洞し的白羽を呑ぬり麗人大ニおそれ其後新羅の貢を闕るを責給ふニ宿禰を遣し給ふ麗人大におそれ命を奉しけるとなん

鐵乃まとぬけし箭の鋒人をもつ殺さる人に射ぬかれの程よりまつ程

縣守

仁徳朝吉備中國川嶋村に巨蚪ありて常に行旅を害しけり縣守水ニ入て其蚪を斬てそのほか種類を悉せり河水これか為に赤し

蚪きなちしたれあと余清き名の流まてに不吉備乃川らな

難波日香蚊

日香蚊大草の皇子に仕へけるに皇子安康天皇の為に殺されたまひけるに日香蚊皇子の罪無して亡ぬ難に逢ひたまふを悲しみかなしみて終に自刎て死す其二子も又父の死に従ふ　雄略天皇の時後をたつねて姓を大草香吉子と賜ひしといふ

死ぬるこそもとより臣の道なれや君の供にたつこそ此

佐伯部賣輪 一名仲子

賣輪押磐皇子に仕へまつり　雄略天皇皇子を殺したまへる時賣輪皇子の屍をいだきて呼叫んでやまず天皇あやしみて此を殺したまふ後顕宗朝に改て皇子を葬せ給ふに賣輪皇子と坎を同し辨別せざりけれは即雙陵を作りて其儀も又一の如くしけれ仁賢朝に賣輪の後をもって佐伯の造となし給へり

たぐひなき君と臣との契りをば死ての後も忘れざりけり

日下部使主

使主押磐皇子に仕へ蚊野の變にその子吾田彦と王の二子を奉して竄伏し已にして

誅をおそれて自縊て死せり其意以為吾ら
王に仕ふる事世人の知ところ殺なれハ吾れ
死せされハ王の二子免れさらむと故に自
縊れて其蹤をたち子吾田彦をして終始王
の二子に仕へしめ固く臣の節を執しなり
王の二子兄ハ億計といひ弟ハ弘計といふ
此事諸越晋の景公のとき趙朔のために杵
臼程嬰のなせる所と同一軌なり其功真に千
載にくちはいせんや此二子ハ後天位に即
なり給ひき則 顕宗天皇 仁賢天皇これ也

なり
君に忠の道を尽さたるを死すといふとも其名釈あるをこの子ありし
巴提使
欽明朝に百濟に使を一日雪深く降たる夜
虎の為に其兒を噉殺されけれバ巴提使怒に
堪へれ虎の蹤を認て山に入終に虎を刺殺
して其皮を献せり
噉ゑをおそるゝ子をわすれて虎を刺さハ国乃威稜たてまつる
物部公尾輿
欽明朝に百濟國佛の像を献る 天皇是を

禮せんとし給ふ公奏曰吾國恒に天地神祇
ふ敬事し給ふ今まさに蕃神を拜み給ふ事神
明の意にあらんと

荊蕎乃みち絶にし世を思ひきやあはれ君かためにある哉

調伊企儺

欽明朝将軍河邊瓊缶新羅を伐ち軽進して
利を失ひ全軍皆降る時に伊企儺獨奮ひ勇
み戰ひ罵て死せり其子舅子も又父を抱て
死せり

わか肉をえはたくくへと飲とてもやまとの絲をたえさし計哉

上毛野形名妻

舒明朝ふ形名蝦夷を討て利あらさ賊の為
ふ圍まれ殆危かりしにその妻自劍を帶し
出て戰ひかけその婢をして弦をならし勢
を助し竟に遂に賊を走しける

吾吏子哉のこゝするかまへ鏡にかけし光をて楽まれ季来

大職冠藤原公

公皇極朝に官にありて病と稱して就ら
に退ひて津國三嶋ふ隠れ密に皇弟及ひ
中大兄と謀をあはせて入鹿の亂を平け

四朝ニ歴仕して大津朝ニ薨しぬ
まりし履とりをしなれさ此まれ給ふ作よみてへりあるを於下られ

大伴部博麻

博麻ハ筑紫の軍丁なり　齊明朝百濟の役に唐兵の為に虜され唐ニ在ること三十年忠を皇國ニ輸せし　持統朝ニいたへることを得たり
思披をおもふさるかなり侍帰まりとも赤き志をもちやあらをへ家

道公首名

文武朝に筑後守ニ任し肥後の事をも攝た

りし生業をもて先耕種を教へをけまし陂池を起して灌漑を便ニ民大ニ其利を蒙り卒ニ及て祠を立てこれを祭る
稲をとりし麥も作らしらまし人の志居にあそこに其ところ

文部路祖父麿　安頭麿　乙麿

元正朝父石勝官の漆を盗ニ坐せられて流刑ニ處せられたり三子官ニ至り請て奴となり父の罪を贖ふ三子長ハ十二少ハ七歳なりけむ
父の身にかはりし漆をはき草に門のうちあるをはさりしける

贈右大臣藤原公百川

孝謙天皇崩御ましゝして公議を建て光仁天皇を立給ふ實に天智天皇の裔孫ゝ坐に其後抗言して山部王を立給へ皇子緒嗣亦直言を以て顯る桓武朝ゝ政事の得失をいちし彼すみに緒嗣奏曰方今の苦むところ兵と土木とふあり二のことを罷て民力を舒ん云々と天皇嘉して古れを納給ふと史に見えたり

木ら果もそとすみゝる我百川をかきとめしたるを後の非

水鏡ゝ百川姦惡其罪不容誅矣とあるハ俗傳誣妄信をるにたらし蓋水鏡の作者愚昧淫佛本より誣妄多し又其分なり

土も木も軍もいやハやえれんを民の為にと緒嗣ある果をも

和氣公清麿

孝謙朝公忠烈を以て世ふ顕る嘉永四年三月朝廷其忠を褒し給ひて官を贈り號を護王神と賜ひける公の譽を距つる實ゝ千餘年なり

移さし霊神のみことは天の下まても我上そはえまとむ武

和気清麿も忠臣にて皇国の乱れん吉備橋をあらはしたる也

阪上将軍田村麿

桓武朝屢蝦夷を征し出る毎に功績あり東陲遂に寧し

陸奥のきゝしにまさる能人を討終し君の眼ありけるを

藤原高房

淳和朝に美濃介に任ぜ郡に陂池あり相傳ふ堤防壊決ゆるに其水を過むと欲れハ神の崇を祭せる也と必せり逆なんとおもハ死をと公あれを脩曰荀も民に利あらハ死を

とても恨をのこすと

ゆく川の絶ぬ流をかへしてぞ世にかゝる堤乃水ゆるぎなき

橘氏

仁明朝に父逸勢事に坐せられて遠流せらる女徒歩して父に従ふ監吏是を叱しけれハ乃晝ハ止て夜ハ行て父に従ひ父死ゆるに及んて啼泣して葬て墓側に廬をむすひ

人目おもはぬなみだの袖をしほりて野をゆく父の跡とふ方ぞ男にも劣らぬ

衣縫金継女

衣縫金継女少して父を喪ひ泣血やまゆ母

と居けるに其邑に川ありて人常にわたる
事を病たり母子ちからをつくし材を買ひ假橋を
渡しぬ人大に利とせり後年を積てやぶれ
仁明朝其門閭を表し給ふ

後の世の外ふりあはしと父母も見恵の橋をおもひかけゝ哉

閑院藤公冬嗣

淳和朝に大臣に任し施藥勸學の両院を置
て寒族を養ひ子弟を教給ふ子良房良相ま
た賢なり子孫大に興る嘗て佛舍を建て福
祚をいのる事あり當時の風俗又大に公の

累にもあらざらんか

養いやをしへ古の玉笹のかけをのみおもひあまねき

紀夏井

文徳朝に讃岐守に任し政化大に行はれ任
満るに及むとく百姓これを愛し闕に至て留
めむ事を請ふ嘗て吏民の贈遺をうるとある
皆これをかへりそけてうけず唯紙と筆とへ
これを受と以ふ母を喪て三年喪を法とむ

蟲をはらひても生ひそよそ國はみな民をめぐみける哉

大辨藤公良縄

清和朝にあたり南年名江音人藤原基經等皆大辨の下に班せり大辨曰彼皆當今の才賢なり然れば不肖豈其上に居るべきんやと遂に病を稱して門をとぢ

菓むしきそひつし和志毛まことはを未放せうまそ慕ゐしきま

照宣公基經

公文徳　清和　陽成　光孝　宇多五朝に仕へ太政大臣に任しなひ中なる　陽成天皇を廢して光孝天皇を立たまふ廢立のことと吾國にはまたなき例をきこれとおへと

も不肖を廢し賢を立る本其理の當然なり世漢の霍光に比せ然して光に比まさへ公の時猶難きそのあり藤氏の攝關公を始とし

かしおりや天津日嗣をとらまなかし給ふ来るわさまり立まれ

藤師府保利

清和朝に備中介となり風化大に行まれ民ましをを愛しける父母の如し後出羽の亂に攝政基經公公を擧て命じける不招討の事をもゆてし

かくましれ吉備乃春風吹く入事父と出羽の菜るひくれ季

贈太政大臣菅原公

公參議是善卿の第三子なり貞觀中對策及第累て式部少輔文章博士ニ遷り權大納言右近衛大將を歷任し台鼎ニ至り讒によりて大宰權帥ニ貶されたり

ひとりのみ都は雲ゐおもひやるきみ経つゝしの清さはかりなる我

平將軍貞盛

朱雀朝將門叛して下總ニ據れ其勢甚猖獗なり公の父國香亦其ころを憂ことなれり公撃て是を平け其功を以て從五位下ニ敍せ

國乃ある父はあさ夷をうちしおさむる平はいさをを忘るゝも何ぞふう那

右府藤公實資

三條朝人争て道長ニ諂けり公獨り屈せす道長病あり公駕を命して候しけるに病鬼人によりていひて曰賢者来避けるを知ては と道長頓瘳たり時の人呼て賢右府といへり

悩まする人の病のおもきをもしりぞけらるゝ威稜をかしこみまつり

孝僧

僧母に事て至孝なり母魚を嗜けり時に白河天皇嚴ニ屠殺を禁し給ふ故母ニ羞る

事あらバ自ら桂川ニ赴き魚を捕へ吏の
為に執へられけり
母乃為とるまても魚を人の法にみちりしもはかなきなれん

伊豫守源頼義

後冷泉朝ニ頼時及ハ公命を奉して兵若干
を卒ひて河崎の柵を攻るに會雨雪甚しく
官軍大ニ敗れけり已にして大挙し終ニ是
を殲ハ陸奥の王化に服ハるもと實に公の
力なり
清きよふこの庭にはまるぬ陰なくにみなきる源乃なかれ

安倍則任妻

源豫州貞任を討時貞任の弟則任の妻軍の
敗れを見て夫子の免れさるをかなしみて曰
妾獨生て何にかせむ請夫子ニ先立て死せ
むと乃児を抱ひて厨川の淵ニ身を投せり
かく説しぬにたまきも縁の厨川ふかきぬ名をも世に流しなき

江師匡房

堀川朝ニ太宰帥となる其家文学を以て著
るしそれ八世ニ至まり常ていふ我家の
文章ハ朝家の盛衰ニあつかると八幡公

義家も曽て兵法を学ふといへり

文乃あやをハせ手にしおく九重ふ吹もをやまぬ家の風かな

鎮西八郎為朝

為義の第八子なり驍勇にしく射を善せり保元の亂ニ大嶋ニ流され終ニ大嶋を領し又琉球ふ至りて王となり諸島今ニ至まて祠を立て是を祭る

射はらしゝ猛きは風乃末までも響るはのしま八鹿をたてまつる

中納言平知盛

壇浦の役西軍利あらすして官女皆泣て其状を問ふ知盛笑曰事問ふしに至るへし今復何をかいはむと乃自舟中を掃除し自刄して死せ

今ハまた何をいはんとおもひきや舟はちりをも拂ひぬるなれ

能登守平教経

清盛の弟教盛の子なり驍勇ニして射をよくし壽永の亂ふ數戰して功有殆源判官を得んとはしに然して事終ふならすして海ニ投して死ス彼月の前ニ笛を弄花の本ニ歌を詠スるたくひにあらすと

尽於留もれ乃なき失ハ何ゞせん忠風ふまよへしまゝ君ひゞて乃矣

清原頼業

頼業朝儀典故ニ委しく朝廷咨議ある毎に古今を引證して辯折精覈殊ニ至れりといふ嘗て禮記を讀ゞ中庸を表出し經ニ據て解をなせり

過ちを悔及を泳も郷成本道をとやく忠君ひと至なるれ

袈裟

袈裟ハ源渡の妻なり遠藤盛遠見てこれを悦ひ其母を劫してこれを棄さんとれ袈裟

盛遠を紿き夫ふ代りて死せり

わづ清まハ寇れ下にとゞをしへしんぬを乱れしゞえし操なり升李

杵淵小源太重光

重光の主富部氏義仲と戦ひ西七郎の為ふ斬されり時ふ重光譴ことよりて廢せられ軍に從ふ事を得ず跡を追ひて戦地ニ至みれば富部氏既ニ死せり重光乃馳て敵陣ニ入り立處ニ七郎を斬猶奮戦して死を内膳へ武田氏ニ仕へ譜をうつて廢せらる勝頼軍破れて天目山ニ入りたる時追来て從ひ死

を重光の事と其忠貞頗類ひせり東照公そ
の忠を嘉みして其後を録し給ふ

よしや君きみなくもよしや玉みみのきをも見さるらん人を
杵洲乃流をとぢくく小きゝ山わかみのかくと残てありあそせ斗事

上總五郎忠光

平氏亡ひて後忠光頼朝を伺ひ眼に魚鱗を
嵌して眇となり匕首を挾んて從夫にまし
りて鎌倉にあり事覚てとらへれ忠光奮曰我
ハ上總五郎なり主の仇を報んと欲して志
あるのみとその勇れもひ見るへし

かゝる命を残ひおしきゝ志の人ともみなさるる死乃目をいつに来らん

平氏遺臣

平氏の西海に走るや平信兼平家継と謀て
く伊賀の守護を襲ひて之れを破て既にし
て軍破て家継ハ之れに死し信兼ハ再ひ兵
を集めて起て又利あらすにして死せり左中
太常澄ハ長狹六郎の士なり六郎平氏の為
に頼朝を謀つて殺さる常澄又頼朝を狙ひ
撃むとして又ならすにして殺さる平氏亡ひ
て後平景清平盛嗣潜て匿れて糾集後皆頼

朝の禽斬せる慶となれて

西乃海ゟ志川ま越をれとおかしかねてそ於ま多毛に出先る字
家於ゝ免はそらとももろハくらむ乞ゝ見かへて奴沼ま男となる増川
う於てしもむつましかりしあるしに八平氏於よ乃せて於ら川さ越
源をせんと免う於う出かしと流乃底り志川と計於の那
於よひありてうそへくら見れハ於のかし、語ハみてと清越物部のそち

西行

義清姓ハ藤原勇敢ニして射をよくし
鳥羽天皇の北面たり背て栄利をよろこばず
其壮年僧となりて自遯嘯咏自遣頼朝背て

出れを要し韜器を問といふ
なりしか全く待ちまたしよ於不出しら於英ハあり餘つせる於ハありを

中納言藤公長方

長方剛毅敢言清盛都を福原ニ移さんとし
て其事已ニ決せんとせしに長方獨り其非
を極言きり旁人其害あらんを懼しに其言
終ニ行れて遷都のあとやみしとなん
生直於ふ君ゟ言葉りたるし移くく平氏みやを福しはなゟ能

右大将源公頼朝

公流徒ニして数年ありけるに平氏を亡し

奥羽を定て天下兵馬の権を握れり天下の大勢此時より一變して慶應三年ニ至る清盛浄海といひ重盛小松といふ

海もあやし小松もかれて鎌倉にあらし吹ぬる風ぞ常なりけれ

判官源義経

義経兵を用ゆる事神の如し兄頼朝の為ニ忌れ身を措ニ地なし終ニ宣旨を請ひて兄を討むとハ然して事ならハ出て奥州ニ走るといふ

國のため忠いさをしき報はたゝまさよく近うそまとてかし本来余か原

佐々木四郎高綱

頼朝杉山の難ニいふて曰吾天下を得たらんニハ必其半を與むと事就て七國を與ふいはゆる七國の守護なり高綱以為賞薄しと乃官を棄て高野山ニ入といふ

宇治川のさきかけしたる紀君か名をそ高野の山の林なりけり

畠山次郎重忠

重忠勇武抜群ニして天質敦厚功ニほこらハ北條氏のために忌諱せられ終ニ禍ニ及へり此人ニして此禍あり北條氏の姦此事

ほくも知るし

うし稀よ見ぬ手まきりはみ次ま迄衣服脱て身を弊れ朽果たる哉

木曽二烈士　越後中太能景　津和田次郎

義仲宇治の敗藤原氏の色を戀ひてはなれは
能景曰敵已ニ迫れり何そ一女子ニ眷々し
て大事を誤りまふやと言葉を竭して諫む
れとも義仲きゝ入れは能景君の厄をみるに忍
のひすとて腹を潰して死す二郎も亦いさ
潔て死ぬ

秋の花をうらむたけみのありしそとおもへは君かなたか森

もの絶世死兵の迷をみんまなき命をのひをかけて我いのちつかへ

鞆繪

鞆繪は義仲の妾なり容うるはしくして勇
あり屢戦に従ひて功あり義仲の粟津野原
に敗るゝや東兵内田某なるもの来り迫る
某剛勇六十夫の力ありと稱は鞆繪搏て之
れを斬る鞆繪戦ニ殆ゝむに衆虜の馬鋸の
鞍をかけて

志のゝ稀乃鞍に血しほの生首と花とはの字にかけてふをかへ

静　微妙

二女ハ妓なり静ハ義經の妾となり義經に従ひて頼朝出れを鎌倉によひて義經の事を問ひ又強ひて舞を命しけるにやゝて義經を別れ悲しみの歌を唱ひて立まひける人々その貞心をおもひやりて涙を垂るにいたるとなり微妙幼なき時父讒にあひて遠竄せられたり微妙長して思ひ慕事いとふかく其寃を鎌倉にうつたふるに父ハ既に死たり終に尼となりて身を終ヘり

つるきをみれゆるへしらん雪芳野山ふかし後ハ婦人たりとも見れ

和か君ハきみにはしれぬ松まつむかしを思ひ出けれ知し森なほ世の姫まへをあらんうち此愛の父乃いはれ歎身のはかなり給

曽我兄弟 十郎祐成 五郎時宗

祐成の祖を祐親といふ嫡子にして廢せられ其叔某庶子にして宗家を継たり故に両家常にむつましからず叔某の子を祐経といふ祐親曽て此を凌暴しけれバ祐経又此を恨みて竊に祐親の子祐泰を殺せし此祐成等の父なり故に祐成等祐経をたおろし父のあたを報ゆるなり

手綱弛しちる根をおろしうち跡し野の末は太刀乃下風

忠信はしとけしあまりは太刀風に胡蝶は忘れしやよ絶えにけり

後乃名をいふも流さんと我纏の身ぞ流りなきをまし

鎮守将軍藤原秀衡

秀衡年老て子孫の國を負荷するに堪ざらむを憂ける折しも義經のはまよひきたりしかバ大によろこび推して大将となし國の事とも擧つて委任せんとぞ教へけるを泰衡忠たのえは終にほろひけるひとり三郎忠衡父の命に背ずして死をも

鐙ふんばり岸をも志らしたゆまずし君がためしへすくはる心をかそ

藤家二士 由利維平 大河兼任

泰衡の亡るや維平勇とありて鋭氣たゞまゝハ頼朝其勇を愛して家人となせり後兼任の亂ニ死してそれ知ニ報ず兼任ハそく父の仇を報るそれハあれとも主の仇を報るそのをきゝうは今我よりぞ始むと即兵を擧て利あらずハして死をも幸殖桉ニ主の仇を報るをきゝぞをあと兼任のいひつるハ陸奥ぞれ時猶王化ニうとく人心暗昧ニして倫理

不明なるをしらずなりん然らざれば主の仇を
報の事豈世になしといはんや
物部のなくまと魂も光るゆ随しかくれの餌をとてえはりきは
後乃なをもあらんし余せよと旋らしも君の仇はもひ川る手なし

相模守北條時頼

時頼執權職を辭きて後遊僧となりてあまね
く郡國を行て吏の正邪を聞民の疾苦を問
ふ歸りて吏の正を賞け邪を黜け民の寃を
あらふ是によりて守宰人々自をけみ風化
大に行るといふ

大上北上りは志らし民草耳よく報ゆくみの法也訴あまねき

相模太郎時宗

文永中元使来時宗受ずしてかへせり已に
して元の兵我に西鄙を掠め再使を遣し我
朝貢を促す時宗怒て其使を斬る元主いかに
て大擧して来仇す時宗撃て此を殲す
細戈ちら報といふ戈さ犯を君をまほしく老子志ぞしくる

青砥左衞門藤綱

藤綱時頼に仕へて断獄を清にさとり曾平
允の名あり或夜行て錢十錢を滑川に墜せ

て五十錢を出して炬を買ひ水を燭して之れ
を撈る曰五十錢にれ失ひて人得るあり十
錢誰か此を得んやと

拾ふ人ハまことに御代の仕ひを照さんまゆみるらぬ人もなし

中納言藤公藤房

建武中　天皇高時を誅し玉ひ天下中興し
て稍政ニ倦玉ふ武夫又亂を思ふ公しきりに
諫て聞玉はざるを以為臣たるの道盡たりと乃
去て北山に入行方を知らずといふ

出たち行方知らぬ雲路かきそ跡さへ世すみしかは

准后源公親房

公中興の終へ保たざらむ事を歎し神皇正統記
を著はし皇統の已ニ微なるを掲く公の
據所小田關の二城南常ニありて第の址猶
存せりと水戸青山氏云へり

弓箭と御名を千代に残しつゝ保ちしをただ水茎のあと

贈左中将楠公正成

公首として大義を唱へ孤城を守りて賊の
衝ニ當り中興の業公の功をもつて第一と
し其忠貞正烈世の膾炙する所也小輩に

小楠公も又然り
言は葉をかひなくちりし矣八重ぬうこなハそれ労は多何をか痛
いさゝかも八葉く半壁に當る人今かすて耻る物称乃無を

小楠公正行

公吉野ニ朝しゝ路にしるし高師直ら官女某を
誘ひ卒を遣して迎ふるふあひぬ公奪ひ還
しそれ事を奏聞は後村上天皇乃公ニ賜
ふ公辭するに歌を以ては源三位昔ぬえ
を射て官女菖蒲を賜はる事と相類せり然
して公のうけさるは三位の及はさる所なり

強たし此かりの契は結はんと葉子嵩蒲の小出ひいりて母上に達

公ノウタニ　トテモヨニナカラウヘクモアラヌミノカリノチキリヲイカテムスハン

楠母

正成の死をる正行悲みにたへは自殺せん
とは母抱て是を止む正行終克義旅を挙て
王愾ニ敵せ乙此母訓誨の力なり
櫻井は庭の訓をたもへ死を嫁し來母語ちるよふなり汁往

左中将新田義貞

卿護良親王の令旨を奉して高時を誅し高
氏の叛するニ詔を受て征討し利あらはし

て終ニ北越ニて死せり後百餘年にして支
族大興世卿の遺烈の及ふ所といふ
生ある日をいけうはまさん人とえぬ新田比正乃後葉なり

伯耆守名和長年
後醍醐天皇隠岐ニいてまし伯耆に移り給
ふ時長年の族挙て擁衛し奉り徒御事なし
再闕ニ歸らせ給ふ事長年の力多きに居れり
御輦を船上山より揖をえらくみやこまかへしくへきもし寺

備後三郎高徳
高時の皇駕を遷し奉る高徳駕を舟阪
山ニ要しく奪んとえうるに駕轉して別
道より出給ひてえたさるに乃間道より趨ひ
奉りて又及ばれば後夜潛ニ行在ニ忍ひ至
り庭上の櫻樹を斫ニ詩を題していくぬ
天皇見て心竊ニ喜ひ給ふといふ
十文字ばかりく櫻木ハ楠なり枝うちこのえ花さしぬるなりけり

上野介結城宗廣
宗廣病て死んとして曰これ年老たり死し
て恨なし但此賊を滅さるを見さるを恨と
以子親朝ニ囑し速ニ賊の首を斬てこの墓

にかけよと子九郎親光驍勇詐て高氏ニ降
て狙ひ撃んとしてあらはれして死せり
をしくはさに首とかきよく国の為今ぞ死ぬとも雄々しかりけり

村上義光父子

護良親王兵を挙け給ひしよて危ニ瀕給ふ
事數々にしてみ身を全しまへ事實ニ義光
父子の力にあんありける故ニ王の幽せられ
給ふにあたりては其親も亦皆 天皇のた
めに殺され一人も王の難ニ死力をいたし
て救ひ奉るものなし歎くへき事ニあらすや

おのれ子ありこの父ありて志ありしを今ぞ此楠ハ勤ると云ふ

瓜生母

瓜生兄弟脇屋義治を奉し里見時成を大将
として金崎を援ひしに賊のために敗られ
一軍氣を失ふ時ニ其の母神色常の如くに
して義治の為ニ起て酒を行るこれに依て
軍氣大ニふるへり
人これを見てよ瓜生か刀自のこそ教ハ菊楠ニかをりあひけり

中納言邦光

高時本間某をして邦光の父資朝を殺さし

む邦光間行佐渡ニ至て決別せむと請ふ其
ゆるされ邦光憤にたへも其を殺して亡還
る時ニ年十三後顕官ニ至る
縈ともしき心もおろ／＼かきも葉日野のうち見ハ錦なりけり

肥後守菊池武光

正平十四年少貳頼尚六万の軍を引て来
冦武光懐良親王を奉し撃て大ニ此れを敗
て西南官軍復大ニ奮へて
なき人の世を稀しかるへ菊ちる里心ゆくしに從ふ名残は斗季

五郎左衛門楠光正

光正髪をおろし南都ニ匿れて将軍義教を
刺さむと欲を事覚て縛に就く従容として
詩歌を詠して死を後義教赤松の邸ニ招か
れ満祐のたぬニ弑せらる満祐猿楽をして
其興を粧し鶏飼の舞ニ至て兵忽ち起て迫
て弑をと蓋其謀なり
杉も老し浮磨きを死けと毎精清らの名を學とうてきし根を

太田資長

資長い上杉氏の臣なり学を好みて籌畧あ
て扇谷を輔て威名東國ニ震ふ曽て吉夢を

得て江門城を築て居れり

物部乃たけき中よりも月花をよろこふ人は天にもあふつゆ

北條早雲

早雲嘗て人ニ謂ていはく今諸源稍衰へ平
氏にまさに興るべきの時あり又夢みらく二
大杉木一鼠のために嚙仆さると卜人曰是
公両上杉ニ克の兆あらん

立春て杉乃木葉は小鼠となりて木陰にみつく虎となるもれも

陸奥守毛利元就

陶晴賢その主大内氏を弑す元就 朝廷に

奏して是れを討ん賊大挙して来犯ば元就
討て賊を殲し終ニ十州を領せり元就ハ大
江氏和歌を好む

雲居まてきこえもたかき乃膳なれをもてはやしけるかな

中納言小早川隆景

公元就の第三子あり出て小早川氏を冒ば
豊臣氏の時筑前に封せられ始て國ふ就心
を綏緝ふかくふけ黌舎を創建し神祠を繕
脩して境内悦服を

かくきえもやすらおもるも高時りせゆゑ君をひとすくれ花笑

霜臺上杉謙信

謙信善く兵を用ひ其迅速なる神の如し向ふ所敵なし敵國是を畏るゝ事虎の如し旁文藝にもまた軍營の詠世稱して絶唱と云

物部乃名をも安かちと定庫雁軍ハ営をおさへてまうす斗庫

右府織田公信長

室町氏衰へしより海内分裂して公風ふ出れを憂へて禍亂を削平し皇室を崇ひ廢れたるをおこし皇風稍ふるふ豊臣氏部下ニ出志を継て海内一ふ歸せり

草薙乃劒霊に生れる君なれはこそ庫ハ津さはらくやしきもの

平手政秀

織田右府少年にして俠を出のむ政秀屢諫むれともきかれも後書を奉して自盡して曰君臣ゝ言を納給さんふハ臣死すとも猶生るゝ如しと右府常ニ謂我ゝ今日あるハ政秀の力なりと

なみならぬきみとおもひてなく/\も諫めし君もなみならぬ身の誠

山中鹿之介幸盛

幸盛尼子氏ふ仕ふ尼子氏毛利氏のた㒵ふ

亡されけるに幸盛遺孤を擁して兵を挙け
羽柴氏に與みして毛利を討羽柴氏のため
に上月の城を守て城陥て死せり

よその命たのまぬ限り大君我みすておもひてをわするゝもわれ

戸次鑑連

鑑連ハ大友氏の世臣なり後道雪と稱し跛
を病みたれとも戦ひ毎に竹輿に乗して衆
を麾し忠鯁敢言して大友氏用る事能はし
て其國日ニ蹙るといへとも猶國を失ふに
至らさるものハ此道雪と高橋紹運との力

なり又入田親眞なる者あり諫を以て死を
大かたはあしき人としてなほひそかにゆく國たえ路の政汁争
まことに忝とそ君のきみたるへきをしらはしと思ふ

大閤豊臣公秀吉

公ハ下位よりおこり織田公を佐けて數功
を奏し後明智の亂に一戦して之れに勝ち
然してよりて西征東伐あたるにはきなし海
内終にその手に歸す然して後韓を伐の事
あり又軒轅驚くへしといふ

天津日のひかりをせにかへさぬ馬のあゆむかたはさはらぬものありけん

國内りは事をあらしめ大王れ御威稜をよそたれ於かむるを案

飛彈守蒲生氏鄕

氏鄕少きと紀織田公ふ謁しけるに公其氣慨を愛して英物といひて終ふ女をもつて妻とし給ふ氏鄕雄傑大志小人從て媒蘖しそ於死をる良死ニありしといふ

志ら絡なとよみうむきれ山風ハ吹くいまは之よ身に志くふか案

肥後守加藤清正

征韓の時清正咸鏡道にむかひ道を轉して北元良哈ふ至て二王子を縛せり晩ふ論語を讀託孤寄命の章ふ深く感を起しけるとなん

諸越乃席をかちきれ細戈千足の國れ蛇あまれ出り

天野三郎兵衞康景

康景の邑ふ人の竹を攘む者とありて卒これを研る盜むそ於誣て官ふ訴ふ官判して其卒はさに斬ふ當るとせり康景歎曰賊を斬ること天下の通法なり若これを罪と爲んふハ吾請これふ當んと遂ニ官を辭て去るといふ

ゆくゑしられす休みぬる人の一つに直なる筆八あらもとにまさる

伊賀守板倉勝重

勝重京尹となりしころ大坂いまだ亡びざる世情危懼して騒然たり勝重綏撫よろしきを得て民其徳ニ懐き仰ぐこと父母のごとし年老て子重宗を薦て自代る重宗能其緒を継き民これを敬ける神の如し重宗の子重矩もまた京尹となる没後民其徳を思ひてこれを祠を立て祀るに至るといふ

子比ありくたみをあつまそ三十年ゆくも吹傳へきしも家乃風の非

有鄰堂藏

惺窩藤原肅　　羅山林信勝

東照公志もし肅を召て書を講せしめ給ふ本邦の學者程朱を崇信するは肅を始とし信勝も公に仕へて帷幄に出入し參贊密勿補益する處おほし

島もはきゆみもなき御時をゆくさる法乃道を諸にしらしめ給ひけり
文乃海たえしかるを我教ありなみもなきまて國乃神かり

縣居加茂真淵　　鈴屋本居宣長

縣居翁ハ遠江岡部郷ニ生れ京にのぼりて稻荷の荷田宿禰東麿の教を受て後江門に

いにしへ田安家に仕ふ近世古学ひらけ古の詞心をも尋ね伺ふことをうるはそもそも此翁の恵みにそ有ける鈴屋翁は伊勢松坂の人年三十餘りなりしかと縣居翁を師とし然して師の説にならはなるといへことをたゞに玉ふはさまに志るせしも亦近世古学の一大家なるは世の知るところなり

ふるきふることゝものゝ説得しもかすまてし思へはまたしも心ゆくみちなりけれ

あらしかくし教たるへしとさき言葉にもつみそたふるのみちりまし

伊吹廼屋篤胤

伊吹廼屋翁は出羽人なり文化頃より神祇の学に仕へまづ鈴屋翁の學をつきて著し所のふみ殊に多し

神代よりうけつたへこしいにしへのみちをひらきし玉襷の書

讀史餘感終

讀史餘感後書

余去とし東京にありけるをり祖父鐸山君彼の
序に此讀史餘感ハ志ある人に見せまほしけれとて授
ハ以來しの人ならねといとよく志を揺ふ感ふかく
おほえけれハ彼是ともものしける人々にも序跋
をこひもとめ此度梓にのほせ世に公にして子孫
に傳へむとやうにのふ曾余に跋志ありけるに來
當門の且はあさくあれハ誤格非違もまた多かる
んこそも人々よろしく訂を得あへくのみ

明治四年正月志るす

孫　近藤幸止

亀山　有為堂蔵版

日本橋通一町目	須原屋茂兵衛
同　二町目	山城屋佐兵衛
同　所	小林新兵衛
芝神明前	岡田屋嘉七
同　所	和泉屋市兵衛
通油町	藤岡屋慶次郎
馬喰町貳丁目	森屋治兵衛
同　所	山口屋藤兵衛
浅草茅町二丁目	須原屋伊八
横山町壹丁目	出雲寺萬次郎
同　三丁目	和泉屋金右衛門
兩國吉川町	大黒屋平吉

版